

大博物館だより

1994.4
No.11

津山郷土博物館



出産届 文化8年(1811) 館蔵

この資料は、江戸時代の出産届けである。下横野村直吉の妻が妊娠したため四か月目の届けと、その後無事男子を出産、母子ともに元気であることを、村庄屋から大庄屋宛に届け出ている。

江戸時代中期、津山松平領内の人口は少しずつ減少していた。その原因として、享保期(1716~1735)から天明期(1781~1788)に飢饉が続いたこともあるが、貧弱のために「まびき(出産直後に子供を殺すこと)」がおこなわれていると考えられていた。津山

藩は、このような悪風を禁止し防止するために、妊娠四か月目の届けと出産届けを義務づけた。そして、流産や死産の場合には、大庄屋や大年寄が不審な点がないかと検視をしている。妊娠届けを怠った者や、「まびき」を行った者は、刑罰に処せられ、また、双子の出産や、貧弱者には養育費も出ている。

今日では、母子手帳の交付や出産届けはごく一般的なことだが、江戸時代の津山領内にこうした制度があったことは興味深いことである。

研究ノート

美作国式内社高野神社 の鎮座地をめぐって

1

『延喜式』巻9神名上・巻10神名下には、全国の国家の祭祀する神社の名称と所在郡が記載されている。このうち美作国内には、大庭郡に佐波良・形部・壹粟(2座)・横見・久刀・菟上・長田の8座、苫東郡に高野・中山の2座、英多郡に天石門別の1座、計11座が記されている。このうち、高野神社以外の11座については、今日の神社との関係がほぼ明確であるが、高野神社については、現在の津山市二宮に所在する高野神社が苫西郡に比定されるにもかかわらず、『延喜式』に苫東郡と明記されていることから、古くからさまざまな解釈が試みられてきた。

2

まず、第1説は式内社高野神社と二宮高野神社を同じものとみる。その根拠は次のとおりであろう。

- ① 二宮高野神社は美作国内で一宮中山神社に次ぐ社格をもっており、式内社にふさわしい。
- ② 『今昔物語』に「中参(ちゅうさん)は猿、高野(こうや)は蛇」とある高野神社は、宇那提森の大蛇伝説のある二宮高野神社がふさわしい。
- ③ 後述の高野本郷高野神社の旧社名は八幡神社であり、高野神社を称したのは明治維新の後である。
- ④ 二宮高野神社には、応保2年(1162)銘の本造隨身立像や伝藤原行成筆の木造神号額等の平安時代の文化財が伝来しており、式内社たるにふさわしい。

第1説は古来の通説であり、最も常識的な説といえるが、その最大の弱点は現二宮高野神社の所在地が苫西郡であり、『延喜式』に苫東郡鎮座とされていることと矛盾することである。矢吹正則は古くは香々美川をもって苫東・苫西の郡界とすることにより、この矛盾を解決しようとした(『美作略史』巻1)。だが、承平年間(931~938)に成立したと推測される『和名類聚抄』によると、現二宮高野神社は苫西郡に所在することとなり、それとほぼ同年代の『延喜式』の時点で現二宮の地を苫東郡とすることは無理である。

3

このような第1説の矛盾を解決しようとしたのが、

式内社高野神社と二宮高野神社が別個のものと考える第2説である(熊谷保孝「式内社高野神社と二宮高野神社」『律令国家と神祇』)。その論拠は次のようにまとめられよう。

- ① 『延喜式』に苫東郡にあるとする式内社高野神社は、古代の苫東郡高野郷に比定される現津山市高野本郷に鎮座する旧郷社高野神社がふさわしい。
- ② 『今昔物語』の「高野は蛇」とある高野神社は、第1説のごとく大蛇伝説のある二宮高野神社と考えてよい。
- ③ 高野本郷高野神社の現在の祭神は高野造祖神となっているが、一説に彦波限建鷄草葺不合尊を主神し、応神天皇と神功皇后を相神とする。これを裏づけるように、中世頃の3体の小神像が本殿内に安置されている。これは、鎌倉幕府の勢力伸張とともに、八幡神が勧請され、本来の葺不合尊に応神・神功の両神が合祀されて、社名も八幡神社と改称されたのであろう。それ以前の平安時代は高野神社と称したとみてよい。
- ④ 高野本郷高野神社の鎮座する高野地区には、竹塚古墳(正仙塚古墳)や夜半廃寺など古代遺跡が集中的に分布する。二宮高野神社の鎮座する二宮地区にも、美和山古墳群など大型古墳があるが、古代寺院跡は存在しない。鳥越憲三郎説のごとく、古代寺院が豪族の現住地ではなく、その出身地に建立したもの(鳥越憲三郎『吉備の古代王国』新人物往来社)とすれば、二宮地区には古代豪族は存在しないこととなり、ひいては有力神社が鎮座していたとは思われない。
- ⑤ 二宮高野神社は「ウナデの社」とも呼ばれたが、ウナデとは水田灌漑のための人工水路をいう(真弓常忠「宇奈提考」『神道史研究』24巻2号)。ところで、八木意知男によれば、津山盆地の低位部はもと湖沼であり、その湖沼は少なくとも平安初期までは存在していた(八木意知男『歌枕の探求Ⅱ』和泉書院)。とすれば、二宮高野神社は湖沼部の干拓事業の進展にもなって成立した新しい神社と考えられる。

第2説のうち、③④⑤は未証明の仮説にすぎず、そのような仮説にもとづいて高野神社の鎮座地を考定することには無理がある。しかも、その仮説もおよそ成立困難である。まず、夜半廃寺は発掘調査が実施されていないため、寺院跡かどうかも含めて遺

跡の性格は不明であるが、現在出土している瓦は平安時代後期のものであり、それと古墳との関係から豪族の出身地云々を論ずることはできない。また、八木の津山市街地湖沼説は現在の押漕付近の吉井川に長大な堰堤を築かないかぎり地形上不可能といわざるをえない。

しからば、第2説で傾聴に値するのは、①の苦東郡高野郷に所在する神社に比定する点のみとなる。だが、高野本郷高野神社は明治初年まで八幡神社と称したのであり、それが『延喜式』の高野神社であるなら、なぜ中世になって由緒ある式内社の名称を変更しなければならなかったのか③の説明だけでは理解しがたい。また、仮に式内社＝高野本郷社、二宮＝二宮社とすれば、『延喜式』が編纂された10世紀初頭以後、一宮・二宮制が成立したと推定される11世紀末頃までの150年程の間に、急速に二宮高野神社の社格が上昇し、逆に高野本郷社はその間に急速に社格が下降したという不自然な事態を想定せざるをえなくなる。

このような第1説・第2説の弱点を補い、両者を折衷させたのが第3説である。すなわち、高野神社が高野本郷から二宮へ移転したと解し、『延喜式』に苦東郡にあるとすることと二宮に高野神社が現存することを矛盾なく解決しようとする。この第3説は、式内社高野本郷社が11世紀以前に移転して二宮社となったとするA説と、式内社・二宮がともに高野本郷社であり、中世以降二宮の地に移転したとするB説の二説が成り立つ。第3説は巧妙な解釈とは思いますが、肝心の移転を証明する史料は何もない。両神社とも移転の記録・伝承とも皆無であるし、何よりも高野本郷から二宮へと全く別の地に移転する理由が説明困難なのである。

4

以上のように、式内社高野神社の鎮座地については三つの見解があるが、筆者はそのうちの第1説が正解と考える。それでは、この説の最大の弱点の苦東郡をどのように解釈するかであるが、それを『延喜式』の誤記と考えるのである。国家が編纂した権威ある法典に誤記など考えがたいとの向きもあるだろうが、『延喜式』の編纂過程を考えると大いにありうることなのである。

つとに喜田貞吉は『延喜式』神名式の郡名記載に不備のあることを指摘していた(『延喜式の杜撰』『歴

史地理』33巻3号)。すなわち、『神名式』阿波国名方郡に天石戸別八倉比賣神社以下9座が記されているが、この名方郡は寛平8年(896)名東・名西の2郡に分割されており、『延喜式』編纂時には存在しない郡名である。次に、桑原神社の所載する下総国岡田郡は延喜4年(904)豊田郡と改称された。三河国宝飯郡所載の石座神社は、実際は延喜3年(903)宝飯郡を割いて置かれた設楽郡にある。美濃国多芸郡大神社・久美彦神社は、斉衡2年(855)多芸郡を割いて置かれた石津郡にある。阿波国美馬郡鴨神社・横田神社・天埼立神社・倭大国玉神社は、貞観2年(860)美馬郡を割いて置かれた三好郡にある。

同じ『延喜式』でも民部省式では上の郡名はすべて新しい名称となっており、新しい郡の異動を反映しないのは神名式のみの特徴となっている。ところで、『延喜式』は延喜5年(905)編纂に着手され、延長5年(927)完成されたものであるが、それは貞観13年(871)完成の『貞観式』を補訂したもので、その『貞観式』は弘仁11年(820)成立の『弘仁式』を補訂したものである(虎尾俊哉『延喜式』吉川弘文館)。つまり、『延喜式』の基礎は『弘仁式』にあるのである。その際、先の『延喜神名式』の郡名表記の不備が、すべて弘仁11年以後の新しい郡の異動に限られることからわかるように、『延喜神名式』は『弘仁神名式』以来の郡名をそのまま機械的に記載したと考えられるのである(宮城栄昌『延喜式の研究』論述篇 大修館書店)。

5

その唯一の例外が問題の美作国苦東郡である。すなわち、貞観5年(863)5月26日、美作国苦田郡が苦東・苦西の2郡に分割された(『日本三代実録』)が、『延喜神名式』はこの新しい郡名の異動を反映しているのである。だが、上述来の『延喜神名式』の編纂姿勢からみて、美作国に限って綿密な郡の考証を行ったとは考えがたい。『弘仁神名式』段階では分割以前であるから当然苦田郡とあったのを、『貞観神名式』もしくは『延喜神名式』が、おそらく郡の分割という新しい知識にもとづき、機械的に苦東郡と改めたにすぎないと考えるのである。

(湊 哲夫)

